
太平洋「魔術」戦争

盆次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

太平洋「魔術」戦争

【Nコード】

N2001BA

【作者名】

盆次郎

【あらすじ】

日本の女子大生 斉藤深雪 は交通事故に遭ってしまい、気が付けば病院のベッド。

やれやれ助かったかと思っていたらそこは70年前、1941年でもしかも「魔法」何て物が存在する異世界ともつかぬところだった！！

太平洋戦争と同じ時代・地理だけれど「魔法」が実在するへんてこな（？）架空戦記？ファンタジー？のつもり（どっちやねん！）
…初めてのド下手ですが頑張ります。

プロローグ（前書き）

初投稿。皆様の秀作読んで勢いで書いてしまいました…
頑張ります。

プロローグ

斉藤深雪 18歳。

今年の春に高校を卒業し、福岡の大学に進学した彼女は。

「これでもかー！！！！！！！」

今、戦いの真つ最中であつた。

「姉貴。姉貴の荷造り能力のなさは分かり切ってるんだから諦めなよ」

ぱつぱつと彼女の奮戦を総括したのは 斉藤実。

「姉貴の家事能力のなさは常軌を逸してるし、後かたづけに苦労するのはこつちなんだから。さつさとどいてくれ！！」言葉の二の大剣で姉を斬り捨てる愛すべき弟である。

「うるさい！！女の子の荷物には見られちゃマズいモンがあるって知つとろーがっ！！」

「……いや、姉貴。そう言って最後は俺に泣きついて幾星霜って感じなんだが？」

「うっ」

「それに姉貴の下着なんて色気もクソもねーのばっかだし」
「ひどっ！」

「否定できるんか？」

「うっうっ…」

「分かったら退け。あとは俺がやる」

「…ハイ…」

この弟、勉強の方では姉に全く適わない。それこそ足下にも何とやら。

姉、深雪は高校時代、成績は常にトップ3、女子剣道部の主将も務めて、絶大な人気を同姓からも集めていた、文字通りの才色兼備。

ちなみに大学でも現在進行形。詳しい内容は筆者の精神衛生並びに本人に自覚がないので省略。

まあさほど百合ではないので問題ないと言ってても良い。
では何故書いたのか、それは謎である。

そんな姉の唯一最大にして壊滅的な弱点こそ「家事全般」なのである。

「全般なので唯一とは言わない」とは彼女の弟の至極最もな言葉であり、

お約束のようにこの発言の直後に吹き飛ばされた。南無。

その腕前たるや

「物探しⅡ発掘調査」彼女の部屋は別名『床が見えない魔窟』である

「掃除Ⅱダンジョン」彼女の部屋は掃除するのに覚悟がいるのだ

「料理Ⅱ地獄の釜」彼女の料理は神をも殺す
という具合である。

決して誇張ではない。

調理実習で硫化水素を発生させ、呼び出しを食らった女子高生は世界広しと言っても彼女くらいなものであろう。と、言うより居たら困る。

対する弟、斉藤実の方は…容姿そこそこ、成績そこそこな高校1年生帰宅部である。

ちなみに「授業・HR終了後速やかに帰る」学生を「強化系帰宅部」というそうな。

それで行くと彼は「超強化系帰宅部」にカテゴライズされる。

5

何せ教師に見つからなければ「終了後、全速力で走って帰る」からである。

理由は姉が帰ってくる何だかんだで時間が潰れる（姉の無自覚の破壊活動から家を守る）のでそうしないと自分の時間が作れないからである。

普通その様な境遇ならば「偉大な」姉の存在に鬱屈した性格になる

危険もあつただろう。

（「偉大な」とは件の姉自身がのたもつた発言。）
しかし彼には唯一最大最強の「家事スキル」があつた。

なぜそうなつたかというところ。

姉弟の母親が家事を教えていると、本来教わらねばならぬ姉はいつの間にか飽きて逃亡。

弟が残つてまじめに聞いているのが常、デフォルト普通であつたためである。

娘を淑女、大和撫子のように育てたいと切に願う母は、最初は文字通り「引きずつて」でも深雪に家事を教えようとしたが、逃亡が3桁（くどいが誇張ではない）に迫つた段階で諦めた。

こんな訳で「才色兼備だけど家事壊滅な姉」と「平凡にして非凡な家事スキル」という世にも不思議な、なんかもの凄く、世間一般から見れば「逆だろ！！？？」という感じの姉弟ができあがつたのである。

閑話休題

姉弟はこの夏休みの家族旅行の準備をしていた。

これは姉弟の合格祝いとして計画されたものであり、父親の仕事の都合でもともと春休みに実施される予定が延びて夏になっていた。

姉弟に不満はない。二人とも自分の父親が優良企業の管理職で年がら年中世界中を飛び回っている事をしっていたし、そのお陰で何不

自由なく過ごさせている事をわきまえていたから。

とは言っても久方ぶりの家族旅行である。弥が上にもテンションは上がり、8月の旅行なのに早くも準備に余念がない。

……姉の方は完全なる空回りであったが。

空回りした気合いは一回転して「グレムリンの襲撃かっ！」という荷詰めになり、

そのツケは弟に100%濃縮還元される。

具体的には後片づけと書いて「地獄」になる。

それを知ってるからこそその冒頭の遣り取りであり、弟による姉の強制排除であった。

ちなみに小学生の頃からの日常デフォルトであったりする。その間、姉の欠点は解消されるどころか強化されて今に至る。

「あ。そー言えば今日母さん遅いんだっけ？」

「ああ。だから今晚の飯は俺が作るよ」

「やったー！姉さんカレーが良いな」

「はいはい。」

姉弟の母親は時々帰りが遅いのでこういう自体は間々ある。

当然その場合の夕飯作りは弟に一任されている。

深雪の料理は「食べれるモノを作る」というレベルではない。

なので貴之が作るの「家を破壊されないため」という理由からである。

「じゃあ買い物行くか。姉貴来る？」

「ん。行く行く」

姉弟は買い物へ出かける。

その行動が運命を狂わせるとは知らず。

夕刻。

姉弟は買い物に出かけた。

深雪は自宅通学の大学生であつたし、高校生の実は言わずもがなだ。

そんな訳で母親の返りが遅い時、二人は良く一緒に買い物に出かけた。

買う物を吟味し、支払うのは弟。荷物を持つのは姉である。

二人の性格を知るものならば当然の事であろう。

「こう言うのって普通男が荷物持ちじゃない？」と姉の方は不満があるようだ。

「姉貴の家事能力のなさは普通じゃないし、買い物選ばせるとまともには吟味できないし、あまつさえ安売りとか甘いモノに釣られるしあとは…」

「ストー…ップ！…！！ 分かった、分かりました、分かりましたよ…！」

弟の発言を遮りやけ気味に叫ぶ姉。

否定する要素が全くないのでこうするしかなかったたのであろう。自業自得。

「分かれば宜しいのだ。分かれば」

「うう… やっぱり間違ってる気がする」

「自業自得だろうが」

「…否定できません」

いつもと変わらぬ役割分担、いつもと変わらぬ遣り取り。

…
ここまでは何も変わらぬ日常であった。

2011年7月18日
午後9時のニュース

「本日午後6時頃 北九州市八幡東区 の交差点で車数台が絡む
事故が発生しました。」

この事故で男女7名が死傷し、このうち交差点で信号待ちをしていた男女2名が意識不明の重態です。

警察が2人の身元を調べると共に事故の詳しい内容、原因などを現在捜査しています。

続いてのニュースです。

本日小倉駅で……………」

プロローグ（後書き）

こんな感じですが頑張ります。
感想など頂けたら感激です。

プロローグ1941

『状…は？』

『……治療は……きました。今は……ます』

どこか遠くで声が聞こえる

そう認識が追いつくと、体は動かせないながら深雪の意識が覚醒する。

『後遺症……大丈夫か？』

『……擦り傷程度でしたので……ただ、頭を……打ったので……』

『危険があるのか！？』

『いえ、打ったと言っても瘤程度です。ひびも入ってないと思われ
ます』

『良かった……』

『とは言っても頭部を打っております。なので経過を注意して見て
おります。』

『大事な部下だ。宜しく頼む』

はて？

自分に上司なんて言う存在が居ただろうか？というか治療？
脳内を埋め尽くすクエスチョンマーク。

それら进行处理する事で自分のみに何があったのか、徐々に判明して
くる。

(そつか…実と買い物に出て…あの交差点…光…はねられたんだろ
うなあ。で、病院に運ばれて治療を受けたと。うんうん、毎度なが
ら運が強いねえ)

剣道をしているのとは関係はないが、彼女は幼い頃から生傷の絶え
ない子供であった。

喧嘩上等!と言った感じだったので打撲程度なら結構な回数経験し
ている。

で、毎度毎度せんとひりたんかしゃ関係者の中で一番軽傷ですむジnkクスがあつた。

なので頭を打つくらいと言う事ない筈だが、今回はやけに体が
動かない。頭はほぼ覚醒してるので実質金縛り状態である。

これが交通事故というモノなのかな〜と鷹揚に構えていた(実際は
病室で寝ている)彼女だがそこでふと気がつく

(実は!?!あの愚弟はどうしたっ!?!??)

この女性、家事という本来女が勝つべき(と本人が思っている)分
野で適わないせいか、総じて識域下での弟の扱いが荒い。こんな状
況でも愚弟呼ばわりである。

ともあれ弟の安否が分からないとあってはオチオチ寝ても居られな
い。

覚醒した意識で無理矢理体を起動させようとする。すると何かが頬
を撫でるような感覚の後、彼女の臉がパチツと開いた。

「……………んえ?」

意外にもあつさりと解けた金縛りに拍子抜けした声を出す。
が、ほぼ同時に先ほど以上のクエスチョンマークと違和感が押し寄せてくる。

(どこどこ？これ誰？つかなんじゃこりや？？？？？)

先程述べたように彼女は病院と縁が深い。

縁が深いと書いて「常連客」と読む。その心は？

(知るかなもんっ！！間違いなくいつもの病院じゃないし、服装からしておかしい！)

彼女の視界に入ってくるのはベッドの上から此方を除く女性2名

一人は看護婦らしいのだが：古い。

昭和かよっ！と突っ込みたくなる格好である。

もう一人は自衛隊のような服装。

此方は親戚に一人自衛官がいた関係で分かる。だがなにか違うような気もする。

深雪が混乱している間に彼女の意識回復に気がついた2人が声をかけてくる。

「斉藤？大丈夫か？」

「斉藤さん？大丈夫ですか？」

自分の事と呼んでいるのは分かる。こっち見てるし「斉藤」と読んでいるし。

自分の事を心配しているらしい2人に深雪は答える。

神様は言いました、「嘘をついてはいけない」と。

なので深雪は正直に言った。このあと何が起こってしまうのかも考えず。

「どちらさまですか？」

瞬間、世界が凍り付く音が聞こえた気がした。

「っ、疲れた…」

うっかり発言「どちら様ですか」の結果がこれだ。

全然大丈夫だというのに2人は取り合わず、「記憶喪失か!!!?」
?」「と大騒ぎ。お陰でさんざん問診やらなにやらを実施され。

深雪は疲れ切っていた。

しかし。

才色兼備を持って知られる彼女は現状を正しく認識していた。

「ここは普通の世界じゃない」と。

なぜならば

CTスキャンやMRIはないのに医者が手を深雪にかざすとそれとそっくりな画像が壁に投影された。(ただし医者が手を下ろすとすぐに消えた)

さらにはライト代わりに指の先に明かりをともした。

深雪は仰天したがさもありなん。

しかしその様子を見た3名はさらに驚いていた。

「忘れたのか?」と。

よく分からないがどうもそう言う事がまかり通るのがこの世界のようである。

となるとここは異世界で、科学技術以外の何かがあるのであろう。

早速上司殿が対処にかかる。

深雪としてはいい迷惑の気もするが、現状が分からない以上、逆らわず上手く対応するのが得策と考えられた。

「…さて、早速だが…私の名前は八田楓。君の上官で現在は海軍に出向している…んだが…覚えているか?」

「…すみません。」

「…自分の名前は分かっているんだな？」
昼間の検診のとき話したりして分かっていたのである。

「ええ。斉藤深雪 18 歳 ……ただ…それ以外がごちゃごちゃという
か変わってるというか…」

そう、名前と年齢は変わっていなかった。ただし

「生年が大正 12 年になっていました…」

「ん？何の不思議も無いだろう。今は昭和 16 年なのだから……何
というか、君の記憶喪失は複雑奇怪だな…ああいや、悪く言ってる
訳ではないぞ本当に、」

そうなのであった。昼間の検診で分かってしまった事。

周囲の風景や服装などで厭な予感はしていたのだが。深雪は昭和に
来てしまっていた。

それを聞いて深雪はお約束通り「きゅう…」とブラックアウトしたが

昼間に検査結果に周囲は首を傾げていた。

元の記憶も完璧なため、一般常識、学問に関しては問題ない。
さらに出来事に関する記憶も完璧。たとえば支那事変とか

なのに、周囲の人に関する記憶がごっそり抜けていると、上司殿達
は見ていた。

少なくとも単純な記憶喪失であるか甚だ疑問の残る結果となった。

深雪からすれば歴史の授業とゲームで得た「歴史事実」が通用したに過ぎない。

それだけなら異世界ではなく昭和へのタイムスリップなのだが……

如何せん昼間の超常現象のインパクトが強すぎ、現状が良く飲み込めない深雪である。

周囲は見慣れたはずの周囲をきよろきよろおどおどしながら見るその様子を見て記憶喪失を確信したとか。

「斉藤深雪」という名前は変わっていないのが逆に不気味である。

悪い冗談と思いたいがそうではないらしい。

痛みはあるわ吐き気はするわ、諸々の状態がここが現実リアルである事を示している。

弟みのの事も気になるが、今はそれどころではない。

深雪は眩暈がしっぱなしで今にも倒れそうな幻覚に見舞われながらも辛うじて聞く

「貴方…は私の上司で、私は部下で…海軍に出向？という事でしょうか？」

「…うん…完全に忘れてるか……」

「すいません」

「いや、いい。気にするな。取りあえずこのままじゃ君は何も出来ないだろう。」

まず、私は八田楓。現在呉鎮守府付きの海軍特務班で班長をしている。君はその班員……なんだが……忘れていたんだよな……」

「はい。……すみません」

「はあ……まあ良い。本来ならば君は予備役なりして一時にしても療養して貰う所なんだが……今はそうも言っていない。必要事項を再教育するからしつかり覚えろ。と、どうか思い出せ。」

「は、はあ……」

「返事はシャキッとせんか……!!!」

「は、はいっ……!!!」

「宜しい。では始めよう」

楓班長の有難いと言うには教育的指導のきいた長 いお話は夜半に及んだ。

分かった事は

・ 斉藤深雪は八田楓率いる海軍特務班に所属し、現在川崎にある。

・ 「八田班」と呼称されるその班は班長八田楓以下女性6名からなる。残り4名は現在別の用事中。

・ 「八田班」は海軍に属するが特殊技能により艦長ないし司令官直

属となる。現在は川崎で艦装中の航母に乗り込む予定である。

「待ってください。特殊技能って何ですか？」

「特殊技能まで忘れたか……そうだな、私たちの存在意義そのものと言ってもいい」

「…なんですか。それは」

楓は告げる。

これが単なるタイムスリップではないことを示す決定的な宣告を。

「『術』とも言う。いわゆる超常現象などを発生させる、使い方ですべて毒にもなる恐ろしい力だ。」

海外では『マジック』『魔術』とも言うな。我々はそれを使いこなす特務班。

斉藤深雪 君はその一員なんだよ」

証拠とばかりに楓は指先に明かりをともす。
夜闇に浮かぶ幻想的なそれを見ながら

「は、はは、ははははは 超展開すぎでしょ……」

深雪の意識は断絶した。

夢の中で何か不思議なモノを見た気がしたのだが、翌朝の騒動もあって完全に忘れてしまうことになる。

1941年（昭和16年） 7月18日

斉藤深雪の数奇な太平洋戦記が、始まる。

「深雪？深雪 ……………！！！！！！！！！！」

上官殿の叫びが夜に響いた。

ブローグ1941（後書き）

ご都合主義が続くかも知れません…

初顔合わせ（前書き）

早く実戦というか本番に入りたいんですが…
もうしばらくご辛抱ください。本当にスイマセン。

初顔合わせ

翌朝

「えと…皆さんおはようございます?」

深雪の朝の挨拶が微妙な感じなのは周囲にいる女性5名が原因である。

うち1名は知っている。楓だ。

上司…いや、海軍らしいから上官か。彼女が他の班員に事情を説明し、招集したらしい。

同僚と集まって何かすれば少しは記憶の回復に繋がるのではないかとの希望を持って。

だが、残念ながら、集まってくれた残り4名には全く見覚えがない。ただ全員同じ軍服姿で楓の右にずらっと並んでいるところ、深雪を心配そうに見ているところを見ると…

(私の同僚なんだろうなあ…全員顔も知らん人ばっかだよ……)

記憶喪失と見られているため各々自己紹介と深雪との関係を話してくれる。

東堂恵理

楓の部下、深雪の同僚。
班では副班長。「念話」を使用して班の取りまとめをするのにこの
ポストだとのこと。

「念話って何ですか？」

この質問は予想されていたのか昨日ほど驚愕されない。とはいっても全員の顔がこわばったのは事実。

深雪はそれを見て（あ…ミスった？）と思った。

この娘、賢い。

本人は知り得ない事だが、「治癒」「念話」「斬撃」は威力、精度はともかく初歩中の初歩なのである。故に面と向かって話しているこの距離ならばたやすい筈なのである。

『これですよ、聞こえてますか？』

聞こえたなら頭の中で会話する感覚で返信をやってみてくださいな。

』

突然脳内に響く声にさらに驚愕した。

みると恵理がニコニコして此方を見ている。

『ええつと…恵理…さん？』

『はい。そうです。これが念話です。…良かったあ。出来なくなつた訳じゃないんですね…本当に…良かった…ぐすつ』

「『ええ!?!』」

見ると念話でも実際の顔でも泣きそうである。よほど嬉しかったのか。

『おいおい泣くんじやない東堂。まだ油断は禁物だ。とりあえず念話は使えるようだし…聞こえているよな。聞こえたら返事しろ』

『八田さ…八田班長?』

『おお、よしよし上手く行ったな。これは互いの顔と名前を認識していれば術者同士、遠距離での通信が出来るものなんだ。』

どうやら訓練も無しに魔術の行使が出来るらしい。体が覚えていると言った方が正解か。

だが、便利と言うより自分の体に恐懼してしまう深雪。

八田班長によれば、他の4名も話しかけてはいるが、深雪の方が名前を知らないので接続できていないらしい。大急ぎで他の4名とも

(初)顔合わせ。

括弧付きなのは深雪にとってはそうでも他の面子にしてみれば同じ釜の飯を食った同期な為である。

…この「釜」にも実は驚愕の事実がある、後述。

高須賀桜

班員。眼鏡を着用している。海軍は視力検査もあるらしい(深雪はそう思っている)のでこの時点で深雪の知る世界とはかなり違うの

かも知れない。…魔術がある時点で今更ではがあるが。

大山夏

班員。これと言った特徴無し…すこし言葉少な。

何でも口、歯並びでなにやら自分に不満があり、それで小さい頃から口数少なかった名残らしい。

すぐさま「どんな口なのか暴いてやろう」と考えたのは深雪らしいと言える。

山崎冬

班員。他の班員と比べると普通…だが話し上手らしい。気がつけば深雪と一番しゃべり、食べ物の好みなどの雑談に突入していた。本当にいつの間にか。

『よし、これで全員で念話出来るはずだ。では念話で姓名を点呼！』

『副班長 東堂恵理！』

『班員 高須賀桜！』

『…同じく…大山夏』

『同じく 山崎冬です！宜しくお願ひします…ってなんだか不思議な気分です。』

『…ええっと…斉藤深雪です…』

『シャキッとせんか！…！…！』

『は、はいっ！…！斉藤深雪です！…！』

『くすつ 何かいつも通りみたいですね』

『ですね副班長。いつも通りの深雪です』

『…いつも通り、色々抜けてる…深雪』

『です。まあでも良かったです。少ししたらいつも通りやれるって事ですよね？』

他の班員からの評価が若干？低いのに気がついた深雪。
恐る恐るではあるが、覚悟を聞いて質問する。

『…あのー…日頃の私ってどう思われてるんですか？』

たっぷり3秒は間が空いた。

班員達は目を合わせ、タイミングを計り、そして答える。

『成績は良いんだけど……生活能力皆無にして要注意人物』

（です）（ですねえ）『『『『『』』』』』』

『やっぱりかつ！！！！！』

深雪は心の中で「そこはまんまだったんかいつ！」と泣いた。
それこそ号泣した。

タイムスリップに超常現象と何でもありなこの世界なら、そこは少しは改善されているのでは、と期待していたところあつたのだが、どうもこの自体を現出した神か仏か何かはそこら辺は厳しいらしい。

29

聞くと昭和の斉藤深雪は料理当番に一切任命されていない。
班の食事は持ち回りで交代に作る事が多いのにも関わらず、である。

おそろおそろ聞いてみると

「あれは…我らの苦い戦訓となった…」

我らが八田班長は念話を止めて本当に、
それこそアンドロメダを見るような遠い目をするし、

「…ええ…噂は聞いていましたが…あれほどとは…」

副班長は思いだしたのか目をつぶり苦しそうにするわ

「まさか調理場が戦場になり、戦友の屍を拾う事になるとは思いも
しませんでした…」

陸軍の石原さんじゃないですが、ハルマゲドンとはああいうのを言
うんでしょ…ね…」

冬は饒舌に悪い冗談としか思えないような話をするし。

「私の眼鏡、お陰で買い換える羽目になったんですよ？覚えてない
んですか？」

桜は信じられない、あり得ないような事実を暴露する。

「……………」

ちなみに夏は一言もしゃべらず震えていた。教科書に書いたような
「ガクガクブルブル」で。ついでに顔面蒼白である。一体どれほど
の恐怖があったのか……………」

「……………何しでかしたんですか…私？」

「ウム。あれは何年か前…」班長が語り始める。

昭和の斉藤深雪の黒歴史が、今、明らかとなる

大日本魔術今昔（前書き）

ちよつと説明だらけですがご容赦

大日本魔術今昔

魔術。大日本帝国において、それを行使する者は「術師」もしくは「術者」と呼ばれ、

『大日本術師協会』が一括して養成・統制している。

さて、この国の魔術師養成は 他国と同様、黎明期にある。

前近代、すなわち江戸時代以前から「術」を使える人間は文字通り「突然」出現した。

突然「力」とでも言うべき能力に目覚める事から「発現」と呼ばれ、遺伝子によるのか経験によるのか、はたまた別の理由なのかはいまだに謎である。

ともあれ全世界でその様な能力に目覚める者達が存在し、非常に珍しい事例ではあるけれど「術者」ないし「魔術師」として実在した。

どれくらい珍しいかというところ『大日本術師協会』に登録されている、すなわち日本にいる術師は全部で42名にすぎない。

これは、「存在の承認」、養成・育成が世界全体で明治以降を待たねばならなかった事によるものである。

前近代において、西洋ではその様な技術を発現させた者は「魔女」とか「魔法使い」と呼ばれた。

後者が権力者に取り入るなどした例も少数あつたが、前者、「魔女」はほぼ確実に、男尊女卑の傾向もあつて情け容赦のない凄まじい迫害を受けた。

いわゆる「魔女狩り」である。

これは中世、ペストや飢饉に見舞われた社会不安で一層残酷になり、熾烈を極めた。

無論 術を使える事が「恵みをもたらす」、具体的には食料を虚空から出したりする事もあったが、一般の人々から見れば結局「不気味」「理解不能」なものであり、教会権力の強かった当時、容易に「悪魔」と結びつけられた。

彼女たちは夜、幕に乗って「サバト」に集まり悪魔と淫行に及び、よってその力を譲渡されたのだとされ、ありとあらゆる拷問、虐殺の対象となった。

これは迫害の初期、どうにかしようと彼女たちが互助協会のようなものを作ろうと開いた集会在誤解されたのではないかとも言われている。

ともあれ西洋において魔術師の歩んだ歴史は茨どころか地雷原であった。

それこそかのロンメルが北アフリカに構築した地雷原レベルの。

日本においてもその様な「不気味な」人間は100%確実に「村八分」となり、追放されるか一切の援助、強力を受けられない境遇に追いやられ、酷い場合は文字通り袋だたきにあつて全てを失つた。

その中には当該人物の生命すら含まれる事がざらであつた。

さらに不運な事に西洋の魔女狩りの情報が一部誤つて入つてきて、その様な術を使う人間は「耶蘇邪教と繋がりのある者」と認識された時期もあつた。

こつという訳で全世界的に「魔術」を使う人間は迫害を受けてきた。例外的に中南米やアフリカなど、一部ではそう言った者を「シャーマン」として崇めたり、政治指導者とするところもあつたが、そう言つた魔術師の多くは大航海時代以降の植民地化の中で真つ先に「侵略」されて果てた。もつて瞑すべし。

それゆえ西洋、東洋において魔術を行使する人間は自分たちの能力を隠す事に徹し、それぞれ互助協会を作り上げて明治に至る。隠す事に特化せざるを得なかつたため、技能の伝承、育成は困難を極め当時行われていたとされる「詠唱」「魔法陣」の技術は後世に

伝承されなかったと言われている。

日本の戦国時代になると西洋では「魔術」への認識変化が起こっていた。

洋の東西を問わず魔術のポピュラーな使い方として「治癒」がある。

これが大航海時代、敗血症などの病に苦しんでいた船乗りの絶大な支持を受けた。

この時の魔術師が男性だったのも幸運だったと言えるよう。

またこの魔術師、「食料」を作り出す事も上手だったので船乗りからの支持は船長をも上回った。

かくて西洋の魔術師、術者達は日陰者からの脱却に徐々にではあるが成功する。

ただ、本当に魔術を使える人間は非常に少なかったのと、依然として魔女への恐怖、差別が続いた事。そして前述の理由により、後身への指導は昔ながらの「徒弟制」の如き状態で細々と人里離れた田

舎のさらに外れの山奥の（以下省略）で行われたので遅々として進まず、完全なる伝承は困難であった。

日本でも明治維新以降、海外の情報を取り入れ、それまでとは一転して術師の保護、育成にあたった。

大日本帝国政府の要請を受け、 紆余曲折はあったものの、それまで全国各所にあった術師の互助組織が集結して作られたのが『大日本術師協会』であり、その管理、統括のもと、日本中の術師が集められ、ノウハウの確立と後身育成の任に当たる事となった。

資源も戦力も乏しいこの国にとって術師は戦闘の勝敗を左右しうる存在であり、その育成が国家の急務にして至上命題であると認識されたからである。

が、如何せん人数が非常に少なかった。

昭和16年現在、日本にいる42名のうち、養成中なのは4名。いかに「発現」が珍しく後身育成が困難かお分かり頂けるであろう。

協会を卒業した術師は「出向」と言う形で陸海軍に協力する。

八田班も昨年度までは養成段階であったが、今年度から海軍に向
する形となっている。

これは上記のように絶対数が少ないため柔軟に運用する必要がある
事と、陸海軍の士官、兵士教育とは相容れないものが多かった事に
起因する。

魔術の行使には「精神」「心理」が非常に重要なウエイトを占める
のは最初期から明確な事とされていた。

それゆえ陸海軍の教育ではその「精神」「心理」に悪影響を及ぼし
かねず『大日本術師協会』しか術師の教育は行い得ないとされてい
た。

ところで明治以降の魔術 「近代魔術」と呼称される は実は
「詠唱」だの「魔法陣」だのは一切必要としない。というより使わ
ない

必要なのは「術師」の「イメージ」「概念」である。

イメージする力が強ければそれだけ大きな術式が可能となる。

これが現在の近代魔術である。

術師育成に関わる人間、特に科学者は、魔術師は脳で常人とは異なる特殊な、「高度な演算」をしているのではないかと推測している。

そして、その演算を旧時代では「詠唱」「魔法陣」で代用していたのではないかと推測する研究論文が明治2年、英国で発表された。

これは世界中に大きな衝撃を与えた。
なぜなら。

この論文内容が事実だとすれば、その「詠唱」「魔法陣」その他を復元し、科学的に解明する事が出来れば

一般の人間、兵士にも魔術の行使が可能となる可能性があるからである！

世界中でこの論文を実証しようと言う研究が競って行われた。日本でもこの仮説を実証できないかと、日本では「式神」など陰陽道の道具に着目した例も多い。多くの学者が取り組んでいるが、未だ成功した者はいない。

故に現在でも魔術師は「徒弟制」であり『大日本術師協会』の独占にして本当に突然、偶然にも「発現」したわずかな「発現者」のみに限られている。

そんな訳だから八田班にとって深雪が今までと同様に魔術を行使できるのは非常に喜ばしい事であった。

もし行使できないのであれば当然深雪を放逐せねばならない。

さらには軍事機密の保持を理由に軍から行動を監視されるであろう。

無論『大日本術師協会』も彼女を監視するのは確実であり、最悪「処分」する可能性すら十分にあった。

ゆえに「念話」が使える事が判明した時点で斉藤深雪は今まで通り「魔術師」であることが認められ、生きていける事が決定したと言つて過言ではない。もっとも、どれくらい使えるのかはこれから判明する事になるのだが。

とりあえず、彼女が『協会』でしかした武勇伝を聞く事としよう。

「……………何しでかしたんですか…私？」

「ウム。あれは何年か前…」班長が語り始める。

「協会は寮制でやってるんだが、その料理当番で君はやらかしてくれてなあ。」

なんだろう、どっかで聞いた事がある。

… ああそうだ。高校の調理実習で硫化水素発生させたんだっ
た。まあでもそこまでは酷く……

「まさかホスゲンを発生させるとは思っても見なかったぞ」

硫化水素の遙か上を行く、毒ガス製造事件であった。

この事件で協会の人間がほぼ全員6週間の病院生活を余儀なくされ
た。

どついつ訳か本人は全く気づかず料理をしていたらしい。

できあがったのは何故かやけに^{オリハルコン}見事な金属塊だつたらしいけれど。

大日本魔術今昔（後書き）

長い説明文ですいません。

これで次回以降主人公達が動けます。
帝国海軍はまだ動けません。

もう一寸待ってください。

斬撃（前書き）

どうしてだろう…全然進まない…

斬撃

「よし、念話が使えらると言う事は術の行使は出来ると言う事だ。本当に良かった…」

そこで、だ。

朝食後、一通りの術式試験を行う。その成績を見て、今後の色々を決定する事にしよう。」

「…あっさり流された…私…そんな恐ろしいモノを…」

ホスゲンは現在でも補率規制を受ける毒性の強い薬品で第一次世界大戦では毒ガスとして使用された歴史を持つ、気管系に被害をもたらす毒性の強い薬品である。

「了解しました。試験方式はいつも通りで宜しいのですね？」

「ああ、副班長に任せる。場所は伝手があるんで連絡する。」

「了解！」

「…術式試験、頑張つて…」

「あー、あれ、面倒で無駄に疲れるからねえ、まあ頑張つてー」

「うん。あれ本当に疲れる。」

「では、始めよう」

場所は近くの軍施設練兵場。ようするにグラウンド。

今日は日曜なので使えるらしい。もちろん諸々の手続きを踏んでは

いるが、結構アツサリ行った。

理由は「術師の訓練？ほう、そいつは珍しい。今日は使う予定もないし後学のために」と言う建前で（見学させてもらえるならばどうぞ使ってください」と言う遣り取りがあったりする。

術師は日本で38名しか存在しておらず（4名は京都で勉強中…）かつ単独行動はなく大体6、7名の「班」で行動するため、日本の術師を見られるのは8箇所のみ。

うち3カ所は中国大陆のため、内地では5つしかない。

それについても一つは「医療特化班」のため、軍人等が見たがる派手なものは不得手としている。

ちなみに深雪を診察して人間MRIをしたのは彼らである。

ちようど別の用事来ていたので診察して貰ったのであった。

中国にいるのは言わずもがな、日中戦争（支那事変）への参加である。

そんな訳で八田班の急な要請はむしろ大歓迎であった。

魔術なんてのは本当に一生に一度見られるかどうかと言う代物なのである。

「まずは斬撃。「治癒」「念話」「斬撃」が一番ポピュラーでかつ初歩とされる。念話はさっきやったし、治癒はその為に怪我人を作るを作る訳にも行かん。」

そう言っつて楓が示したのは練兵場の向こう側におかれたわら束。

標的である。

「最初は400メートルから斬撃を振ってくれ。徐々に近づきながら計測する事で射程、威力が分かる様になっている。」なるほど明治以降、魔術をどうやって計測するかは手探りながらも進歩してきたらしい。

「斬撃ってどういう感覚でやれば？」

深雪は当然分らない。ゲームでやるのとは勝手が違う可能性があると思っつての質問だったが…

「そのままだ。雷なり炎なり、氷なり、人にも依るがともかく「遠くの敵を薙ぎ払う」感覚でこう、ズバーツとだな…」

「…班長、いつもですがアバウトに過ぎるのでは？」副班長の恵理も呆れるくらいアバウトな説明を班長は下さった。

恵理に再質問したところ

「まあ、大体班長の行っつたとおりなんだけど…なんて言っつこう、もっと繊細というか注意してと言っつか…」
上手く言語化できないようである。

「まあ、やっつてみるしかないだろ！」

楓班長の実に男らしいゴーサインである。

魔術に興味津々な深雪に否やはない。

「でだ、理論上は手刀でも「斬撃」を飛ばせるんだが、どうしてか何かモノをもつてやった方が上手く行く。君は刀を愛用していたからな。持ってきたので先ずはこれでやって欲しい。」

魔術は理論に依らないところが多々存在するがこれもその一つ。

どという訳か手に何かを持ち、それを振ったりした方が上手く行く。「イメージしやすい」からではないかと考えられている。

たとえばピストル。

遠距離に術式を行使する術師は銃身の長い空砲を使用する。実包は使う必要がない。

短距離で広範囲に一度に行使する場合は散弾銃を使用する。同じく空砲で。

むろん慣れてくると散弾銃でも長距離射撃は出来るし、逆も然り。

慣れてきた術師は自分にあつた「^{あいき}愛機」を決め、何でもそれ一つでやれるようになる。

八田班の面々も似たようなものである。

が、全員が武道、剣道や杖道、居合道経験者のため 竹刀か杖、木刀か軍刀に偏っている。

実は術師が集まって構成される「班」はこういう風に類似の「^{あいき}愛機」を使うメンバーがそろつ傾向にある。相性がいいのもあるし、消耗

した時に融通が利くからである。

そう言う訳で楓は深雪にいつも彼女が使っている刀、軍刀を薦めたのだが…

「あー…、すみません、杖とかは無いでしょうか？」

今の斉藤深雪の中身、「平成の」斉藤深雪は普通の女子大生である。なるほど剣道もしていたしそこそこの腕前であった。

が、殺傷能力のある刀は（たとえ刃引きされていても）苦手意識とどうか、どうにも使う気にはなれない。と、言うか怖い。

ゆえに「魔術師」杖」という安易なイメージで杖を所望したのである。

木刀という手もあったが、「魔術って言ったら杖でしょ！」と杖を選んだのである。
安易な御仁である。

これが後にとつともない成績をもたらす事を本人はもちろん周囲も知らない。

楓は怪訝な顔をしたが、記憶喪失の影響かと考え、特には考えず、
「あるぞ。桜、お前の貸してやって」

「りょーかーい」

朝から見ているがこの班内は実にフレンドリーというか上下関係に
厳しくない。

軍隊というともっと厳しい所じゃないかと不安だった深雪としては
先ずは一安心と言ったところか。無論ある程度と言つものは存在し
ているが。

ただし朝食の間中「記憶を取り戻すきっかけになるかもしれん」と
いう楓のアバウトな思いつきから班員全員から実にフレンドリーに
弄り倒されたのだが。主に素行で。

「昭和の私、何してんの？」と思うエピソードばかりであったのは
言つまでもない。

齊藤深雪という名前の人物は昭和にいたのも平成にいたのも似たよ
うな性格で瓜二つらしい。

昭和の齊藤深雪がどうなったのか気にはなるが、この調子だとそち
らも案外平成になじんでいるかも知れない。

そして

エスカレーターするフレンドリー恐るべし。ちょうど近くに来ていた
ので買い込んだという、間宮羊羹を口に中にこれでもかとぐいぐい
ぐいぐい（以下省略）押し込まれて危うく再度昏睡しかけた。

首謀者はんちやう曰く、「いや、もう一回寝たら記憶戻るかも知れないと思っ

てな？」

*間宮 海軍の給糧艦。 ようは食料生産、加工をする。 本艦の作る羊羹はかの虎屋にも匹敵すると言われる名物であった。

騒ぎに気がついた班長のさらに階級上の人が止めに入っただけならば深雪の命は危なかったかも知れない。

なんだけれども連帯責任と言って全員で後片づけとかやらされる事になったのは納得できない。

あの人、助けてはくれたけど、赦してはくれなかったとは深雪の談。

そんなフレンドリーな高須賀桜女史愛用の杖を受け取る。

杖と言ってもファンタジーなものではなく、細長い丸棒と言った感じが強い。

持ってみると実にしっくり来る。

あるべきものが戻ったというか、これなら「魔術」も使えど、何故か納得してしまった。

事実、この時深雪は完全に魔術を行使できるようになっていた。しかもかなりの威力で。

すぐ側にいた楓、桜はそれを感じ取り、少し驚いた。

もう思い出したのか、と。

だが、その驚きはすぐに塗り替えられる。

「…あれを斬れば良いんですよね？」うって変わって落ち着いた深雪の声

「あ、ああ。ただ400メートルだからな。最初は届かないと思うぞ。」

彼女の変化に少し驚きながらも楓は言う。

だが。

「いえ、十分斬れます」何故か自信に溢れた深雪の声

「ほほう。面白い。ならばやって見る」

「了解！！」

不適な笑みを漏らしつつ楓は桜と共に離れる。

「準備良し！！」

観測席に着いている恵理が合図を出す。

「よし、では「斬撃」始め！！」「楓の号令の直後

未来の恩恵（前書き）

完全にご都合主義というか、主人公がチートです…

未来の恩恵

「「「「「お？」「」「」」」」

あまりの光に八田班の面々は変な声を出す。

それはそうだろう、通常ここまで光は出ない。

となると考えられるのは二つ

？光の方に無駄に力が入ってしまった。

これは時々ある事である。とは言ってもここまでの光は珍しいが。

深雪の場合、もともと優秀だったのが記憶喪失でそこら辺の制御が甘くなったのかも知れない。

これが普通に考えられる原因である。

もう一つあるにはあるのだが…

？とてつもない威力

……論外、考える必要もないに等しい

これほどの光を放ってかつ打撃、威力の方にも同じだけ破壊をもたらせる術師が存在するか。

答えは「あり得ない」である。

斬撃は威力は絶大で厚さ20？の装甲版でもアッサリ両断する。

唯一の弱点が射程でよくて350メートルというのが常識なのだから。

これが術師が初めて実戦投入された日露戦争以来、術師が最前線に向かない理由の一つである。後に「防壁」の術式が機関銃、砲爆撃に絶えられる強度になるまで、斬撃は単なる無謀な斬り込みに過ぎなかった。

現在の日中戦争では別の理由で最前線に向かないのだが、ともあれ射程の短さは術師全員に共通する弱点なのである。

だがしかし、考えて頂きたい。

魔術とは「イメージ」に大きく左右される。

言ってみれば「ここまでしかできない」と刷り込まれてしまうと意外なほどにその限界で止まってしまう。

ところがである。

斉藤深雪 18歳

彼女は平成の人間で当然の如く「ゲーム」と言うものにも親しんでいた。

彼女の中では「魔術」無限の可能性に等しい。
なまじ『術師協会』での養成、教育を受けてないがために刷り込みの弊害もない。

何が言いたいかというと

いま現在

齊藤深雪の魔術には刷り込みによる限界が設定されていない。
本当に「全力」を出し切る事が出来る。

その結果。

すなわち

練兵場が深雪を中心として向こう側が綺麗サツパリ消滅した。

海を背にする立地だったから海岸線書き換えで済んだものの、市街地だったら何が起こっていたか……想像するだに恐ろしい！

当のご本人（下手人）は

「え？嘘？え、え、ええええええ！！！！？？？？」
絶賛大パニックなう。

誰よりも一番混乱している。彼女としては班長に「やってみろ」と本当に「良い笑顔」で言われたので、アクションゲーム？とかで見た「周囲の敵を薙ぎ払う」というイメージを遂行しただけなのだ。

「殺サレルッ」

という警報が彼女の脳内でこれでもかと鳴り響く。

『エマーゼンシー、エマーゼンシー。緊急レベル5、最大。

母ちゃんの折檻が来ます10秒前！総員、対シヨック、対閃光防御！！』

彼女の育った環境がどういものなのか小一時間間いつめたいのは筆者だけではあるまい。

特に3つ目。と警報の中身、ヤトか、ヤマ なのか深雪？お前は昭和なのか。

生命の危機せつかんに震える深雪だが。

「一体全体どうやったらこうなるんだ！？」

班長の言葉は厳しいながらもお説教というより質問であった。

とりあえず即折檻しよけいと言う訳ではないらしい。

「言われたとおり、標的を全力で薙ぎ払ったらこうなりました…」

正直が一番です。神様は言いました。嘘は良くない事だと。

沈黙

只ひたすらに沈黙

「本当なのか？」

疑り深い班長である。深雪は若干不満だったがこれだけの事をしでかしたのだから仕方がない事かも知れない。

「はい」

正直に返答する。

「：料理だけに飽きたらず、お前は本気でハルマゲドンを起こす気なんだなよく分かった」

「え、ちよ。いや、え、え？」

深いため息と共に班長が漏らしたおつとろしい反応。

深雪としてはそんなつもり毛頭無いのだが、他の班員、周囲の軍人としてはマジな感想である。

そりゃそうだ、常識『射程350メートル』を軽々越えているのだから。

その後も色々質問：途中からは基地の人も交えた尋問になっていたが、本当に種も仕掛けもない（本人にとっては）ので答えようがない。

「まあ取りあえず、だ……この惨状をどうするつもりだね斉藤少尉？」

楓が堂々巡りの様相を呈してきた現状を切り上げにかかる。
もつとも深雪本人にとっては、目をそらしてきた現実に連行される
だけだったが。

「あ、う……と、取りあえず元通りに出来ないかやってみます。」

「……出来るの!?」「……」

「えと、試すだけですけど……やってみます。」

彼女が試みたのはゲームとかで見られる

「どこからともなく光が降り注ぎ、それが晴れると元通り」
ってやつである。

結論から言つと

日本魔術師に残る偉業

ブルドーザー
「土木工事術式」

がこの日発動された。

「…何というか…君は規格外になってしまったんだな少尉…」
班長が呆れた顔で言う。

深雪がしでかしたのは

？大量の土砂を出現させる

これ自体は他の術師でも出来る。量がかなり凄かったが。

問題はここではない。

？土砂を見えないブルドーザーで押し出す

これが今回やらかした事である。

昭和16年当時日本にブルドーザーなんてものはないと言ってよい。試作とか少数はある。が、軍用で、資源も乏しく、そう言ったノウハウにも乏しい日本には贅沢な装備であった。

現状、海軍の場合、飛行場設営にしてもツルハシともっここで文字通り「人海戦術」でエッチラオッチラ作るのである。

対して米国は戦場にもブルドーザーをどんどん投入した。

太平洋の戦いにおいて、日本が占領地で苦勞して一ヶ月は軽く要して中規模の飛行場を作ったのに対し。

米軍はそれらを砲爆撃で「地図から消して」文字通り海兵隊で「埋め尽くし」占領してからブルドーザーを始め機械化された設営部隊でもって「短期間で」「超巨大な」飛行場を作るのが常であった。

良い例がサイパン島のアスリート飛行場である。

日本軍が作ったものを文字通り「消して」、超長距離巨大爆撃機B29の巨大な巢にしてしまったのである。日米の同じ場所の飛行場とは思えないほどの隔絶がここにはある。ついでに原子爆弾を一時的に格納していた跡が現在でも残っている。

そんな訳でイメージしようにも見た事が無いので日本の術師は「ブルドーザーをイメージ」出来ない。術式に組む事も出来なければ行使する事も出来ない。

と、いう常識を齊藤深雪^{みいこ}はぶち壊す。

彼女はこの時代にはないものをイメージできるし、術式に組み込んで行使できる。

そんな訳でいろいろ実施した結果。

斉藤深雪の異常な技量向上が判明した。

チートになった

これを受け、八田楓は彼女をそのまま海軍呉鎮守府所属 八田特務班におく事とした。

それらの技能は今後の戦闘の中で明らかとなるであろう。

理由は彼女の技能を買った事もあるが、何より

もはや人員の入れ替えなんてしている暇はなかった。

時、1941年7月22日

彼女たちの乗る艦フネが間もなく竣工する。

それはとりもなおさず彼女たちの“太平洋戦争”が迫っている事を示していた。

未来の恩恵（後書き）

次はフネに乗り込みます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2001ba/>

太平洋「魔術」戦争

2012年1月6日01時46分発行